

目次

信仰者の歩みに思うこと	1	天への道を示して	33
ルツ記から学んだこと	2	癒しについて	38
詩篇23篇を読んで	8	見えるところではなく	43
主のいつくしみについて	14	必ず解決のある人生	47
黙って耐えられたイエスさま	19	キャメラル? チャラメラ??	49
三本の十字架	21	高級新品	52
忍耐して走り続けようではありませんか	25	春が来た	54
風雨の日に	31	アメリカで見聞きしたこと	55
		人間関係について(1)	59

人間関係について	(2)	61
人間関係について	(3)	63
人間関係について	(4)	66
人間関係について	(5)	69
しかし勇気を		74
神の知恵 神のみ業		75
失望せずに祈る		77
ザアカイ		78
天国		80

主よ		82
神のみことばによつて		83
新しい恵み		84
ありのままということ		85
口の言葉が		87
後ろのものを忘れ		89
ユダとペテロ		90
ヨセフの物語		92
詩篇に見る祈り		93

神の主権	95
傷んだ葦くすぶる燈心	96
イエスさまは命のパン	97
折々の祈りの中から	98
イエスさまに求めよう	100
ああ 主のことば	102
悲しみ 深い悲しみ	103
救いの神なるイエスさま	105
雨降り 風吹き	106

主の光の中に歩む	107
神の言葉を無にしない	109
語る	110
主の守り	111
食べ物をごくたさる神	112
誰の罪のせいで	113
神さまからのギフトの数々	116
思い煩わないで	117

信仰者の歩みに思うこと

「まわりの人はみんな素晴らしい信仰者なのに、私はすぐ神を疑ったりしてしまふ罪深い者なんです。私なんかクリスチャンにふさわしくないと思います」というような悩みを、時々聞くことがある。そんな時、私は「あなたただでなく、真面目なクリスチャンはみんなそういう所を通るんだと思います」と、少し自分の体験を証しする。

人の目にはどうあれ、私たちの信仰の歩みも人生の歩みと同様、山あり谷ありで、そんなにいつも「ハレルヤ、感謝」だけではないと思う。未知、未経験の大きな困難に直面するような時、人間関係の諸問題に悩まされたり、躓きを覚えたりする時、すべての骨折りが無駄だったと感じるような時、失敗を通して自分の弱さ愚かさを思い知らされる時、私たちは冷静な状況判断

ができなくなったり、内面の整理がうまくいかなくなったりする。

そんな時は、すぐ主に祈り、みことばを信じ、委ねることが肝心だと、十分わかっているのに、その通りにできない事がある。「わかっている事と、わかっているように生きる事とは違うんだ」と、私の父はよく家族を叱ったが、信仰者の場合も、わかっているように生きることのできない時もあるのではないかと思う。

「なぜ？ どうして？」と心に湧いてくる疑問に捕らわれて、納得のいく答を見つける方が先決になってしまひ、信仰の足が地に着かないような状態に陥ってしまう事が時々ある。これは信仰者として良くない事だと、あせりつつも…。

聖書にも、特に詩篇には、信仰者の疑惑や葛藤、悲痛や苦悩、不安や恐れ、怒りや口惜しき、やり切れなさ等が包み隠さず書かれている。神を信じる者が、神を信じるゆえに神にぶつける心の叫びがリアルに描かれて

いる。そしてそんな中に、主への賛美、感謝が歌われて
いる。神を信じる喜びと希望と活力が随所に光ってい
るのを見る。昔の聖徒たちも、暗闇の道を経て光を見
出し、勝利の道へと進んでいったのだと教えられる。
光の高地へ行くために、涙の谷を通過しなければなら
なかつたのだと…。

今、私たちがどんな状態であつても、主のもとを離
れないでいれば、必ず信仰の大路に出られるようにな
る。その大路を確かな足取りで歩く者へと成長させら
れる。そう信じて、主を待ち望む者でありたいと思う。

ルツ記から学んだこと

ルツ記は、信仰と愛の美しい記録です。嫁と姑の美
しい愛の記録です。神の民と異邦の民が、神を尊んで
愛し合い、助け合った美しい人間愛の記録です。そこ
に神さまの愛と、すばらしいご計画が見える事実物語
です。

しかし、この美しい物語の舞台背景は、大きな苦難
と人間の深い悲しみであることがわかります。昔も今
も、本当に美しい愛の物語は、悲しみや苦しみの中で
生まれるのではないかと思いました。ルツ記1章1節
〜18節を見ますと、ナオミの家族が、母国がひどい飢
饉になったので、生き延びるために異国の地モアブに
行つたことがわかります。人は時に、生きてゆくため
に自分が望んでいない、やむを得ない選択をしなくて
はならないことが、あるのかも知れません。昔、日本人

も国内では生きていくのが難しい状況だったので、アメリカや南米など、海外に出て行って苦労したと聞きます。

ナオミの一家は、モアブの地でずいぶん苦労した事が読み取れますが、「モアブの野」とありますから、開拓ではなかったかと思われれます。開拓の野良仕事は、男性により多くの負担がかかるわけですが、ナオミの夫は家長として苛酷な労働に耐えに耐えていたのではないかと思われれます。「ナオミの夫は死んだ」とありますが、今でいうと「過労死」であつたか、毒虫か毒草にやられたのかも知れませんが、それから二人の息子も早死しています。同じような原因が考えられると思います。中年の男性ならいざ知らず、活力溢れる若者が相継いで死ぬ、という環境はどれほど苛酷だったことでしょうか。ナオミも当然、野での仕事も手伝いながら、主婦として、男性に劣らず苦労したであろうと思われれます。後で、自分の事をマラ（苦しみ）と呼んでい

ますから。ナオミは、夫と二人の息子に先立たれて、苦しみや悲しみを打ち明けられる友人もなく、助けてくれる親戚もない、心細さと孤独の辛さにもじつと耐えていたと思います。

夫や息子たちとの死別の悲しみに加え、男手がなくなつたための生活の困難は、想像を絶するものだったのではないかと思われれます。しかし、それでもナオミは信仰と愛を失いませんでした。人は、あまりに辛いことがあると、不平不満ばかりを口にするようになってしまつたり、周囲に辺り散らしたり、心がたたくなになつて、人を愛せなくなつたりするのですが、ナオミは信仰があつたから、苦難や悲しみの中でも、愛を失わずにいられたのだと思います。人間の力だけでは、酷い悲しみや苦しみに押し潰されてしまう事でしょう。

神さまは本当に恵み深いおかたです。このナオミに、またとないようなすばらしい二人の嫁、オルパと

ルツを与えてくださっています。ナオミと嫁たちは深く愛し合っていました。嫁と姑の、こんなに美しい愛の關係は、他に類を見ないのではないかと思えます。イスラエルの飢饉が終わったと聞いてナオミは、望郷への思いが募ったのでしょうか。故郷へ帰ろうと決心して旅立ちます。オルパとルツは、なんの躊躇もなく、ナオミについて行きます。この二人は、ナオミの生き方の中に、苦難の中にいつそう輝く、イスラエルの神への信仰の力と、その生き方の価値と幸いを見たのではないかと思えます。

オルパとルツは、ナオミと一緒に行くこととしましたが、ナオミのほうに二人の行く末を案じて、自分の国へ帰るようにと二人に勧めました。ナオミは二人を愛していたので、離れたくはなかったと思いますが、しかし、ナオミは、まだ若い二人の女性を異国に連れて行って、幸福にしてあげられるだろうか。はたしてイスラエルの地で、モアブの未亡人の女性を娶ってくれ

る、良い男性に巡りあわせてあげられるだろうかと考えて、ナオミは二人に自分の国に帰って、幸せな再婚をするようにと強く勧めました。(このナオミから、愛とは人の幸せを願う事だと教えられます。)ナオミは、二人を実の娘のように愛していましたが、しかし、どんなに愛していても、それだけでは、人を幸福にしてあげることが出来ない、という厳しい現実があります。愛する者に、その人が幸福になるために必要なものをあげる力が、自分にはないという場合があるので、人はその厳しい現実の中でもだえ苦しみ、涙するのかも知れません。

オルパは、ナオミの言葉に促されて泣く泣く帰って行きました。この時のオルパの行動は当然だと思いますし、責められません。しかし、ルツの決意は特別でした。ルツは、ナオミの言葉に逆らっても自分の決意を貫こうとします。おそらく、ルツが姑の言葉に逆らったのはこの時が、初めてではなかったかと思われるま

すが。人は時に、もつともな人の言葉に逆らつてでも、自分の信じる道を選びとる事が大切な場合がある、ということを教えられます。

ルツが帰らなかつた理由はふたつあると思います。

一つは、老齡の姑を、一人で旅をさせるわけにはいかないと考えたこと、ナオミ一人だと、ナオミは途中で倒れてしまうかも知らない。とルツは案じられてならなかつたと思います。もうひとつは、ナオミが信じているイスラエルの神への強い信仰です。ルツは、ナオミの神は、私の神、私の主です。と確かな信仰告白をしています。このような信仰を持つ者が、どんな状況の中でも、自分の事はさておいて、他への愛を貫き通せるのだと思います。

それにしても、異邦人の嫁をして、ここまで言わせたナオミの生きた信仰と愛の証は、大きな苦難の中で、どれだけ光つていたことでしょうか。深く教えられます。このようなナオミを、神は苦難の中でも見捨

てず、助けと慰めを与えてくださっています。

故郷ベツレヘムにたどり着いたナオミは、その人々に、自分が苦しみ合つてきたことを話しました。ひどい苦しみに合つたと告げています。やはり異境の地で、気を張つて生きていたのでしょうか。故郷に歸つて本音をぶちまけています。(1・20、21) このナオミの態度から、私たちも、未信者の間では気を引き締めて歩む必要があつても、信仰の友人、知人には自分の辛さを、弱音も含めて、ありのまま話してもいいのだと教えられ、慰めを得ます。

二章から、ベツレヘムに着いたナオミとルツは、生活の糧を考えなくてはならなくなりました。ナオミの夫エリメレクはかなりの資産家だったようですが、モアブの地で全てを失つたとナオミが言っています。若いルツは、何とか自分が働いて生活を立てたいと願いました。ルツは、落ち穂を拾う仕事をしたから、畑に行かせてくださいとナオミに頼みました。当時の社会

で、身寄りのない若い女性の働き口は落ち穂拾いぐら
いだったようです。ナオミ以外は知る人もいない異境
の地で、ルツは心細かったかも知れませんが、しかし、
ルツが『私の神』と信じた真の神は、ルツを見捨てませ
んでした。ルツを幸いな出会いの場所へと導かれまし
た。

ルツが行って落ち穂を拾い始めたのは、はからず
も、ナオミの近い親戚で、後にルツの夫となるボアズ
の畑でした。これは決して偶然ではなく、神の愛の摂
理だったのです。ナオミが自慢の嫁の事を、事細かに
まわりの人々に話したのだと思いますが、ルツの良い
評判は、ボアズの畑で働く人々にも聞こえていたので
した。その畑でルツは、ボアズをはじめみんなからよ
くしてもらいました。この時代にも、（イスラエルに
も）いじめはあつたようですが（2・22）、ボアズの畑
ではそれがありませんでした。雇用主も、使用人もお
互いを大切にしあっていたからだと思えます。（余談

になります、いじめは、どの時代、どこの国の、どん
な場所にもあるもののようにですけど、人が人をいじ
めるのは、相手を粗末に考えるからだと思えます。い
じめは、相手ばかりでなく、実はいじめをする本人も
自分を粗末にしているのです。いじめをする人間は、
非常に人格の卑しい、人としての価値の低い者なので
すが、どうして人は、自分自身をそんなものにしてし
まうのでしょうか。現代の、特に日本のあちこちに見ら
れる、子供を自殺に追いやるほどのひどいいじめは、
人間の尊厳を忘れてしまった社会のありかたのせいだ
でしょうか。卑しく悲しい、不幸な社会になってしま
いました。そんな国を、たとえ物質的に繁栄していても、
誰が尊べるでしょうか。）

ボアズは、裕福な人だったようですが、それ以上に、
人格的にも、信仰的にも優れた人であつたことがわか
ります。ボアズは公義を重んじる、誠実で謙虚で勤勉
な心の温かい紳士でした。ルツが、どのような経路で

このボアズとの幸いな結婚へと導かれたか、そして、イエスさまの系図に数えられたのかは、三章、四章に具体的に書いてありますが、ルツは、その翼の下に避け所を求めてきたイスラエルの神、主から大きな恵みをいただきました。自分の身のことなど顧みず、神への真摯な信仰と、他への愛に生きようとしたルツを、主は豊かに豊かに祝福されたのでした。ルツが信じたこの神さまは、今も信じて従う者を決して見捨てず、恵みをもつて顧みてくださいます。

ルツの幸いな結婚と出産は、姑のナオミにも大きな喜びとなりました。ナオミの苦しみは、主の恵みによつて十分報われたのです。ナオミは、実生活では苦難や悲哀を多く味わった人ですが、しかし、人間関係では恵まれた人でした。亡くなった夫も息子たちも、心優しい真面目な人柄だったと思われまじ、特別に良い嫁たちにも恵まれました。もしかしたら、人間の心の優しさや、美しさに触れることが少なくて、その逆

のものばかりを見せつけられる人生のほうが、人にとつて実生活の困難よりも、もつと辛く苦しいのかも知れない。と私は自分が今、体験していることも重ねながら、ナオミの事を通して、人間の幸、不幸の側面に想いを馳せています。

ルツ記は、聖書の他の書には見られない、人間の欲望や、罪の醜さが記されていない書卷です。人間が皆このルツ記に登場する人々のようだったら、ああ、どんなにいいだろうか。と思つたのは私だけでしょか。笑顔で挨拶される時にも、その人の、その笑顔にはマツチしないと考える冷酷な、醜い問題言動があることを見聞きしてしまうと、「ああ、そのいい笑顔が、その人の心のままであるのだつたら……」と、思つて涙が滲んでくることがあります。それは、人間の罪なんだとわかつていますが、ともあれ、私はルツ記を読んで、ほのぼのと心温かくなり、神さまの愛と、ご真実を改めて深く教えられ、感謝しました。

試し読みはここまでです。

お気に入りでしたら、

ご注文ください。



Penguin Club

<https://penguinclub.net>